

2022. 6. 26. 主日礼拝説教

聖書： マルコによる福音書 14 章 32～42 節

『目を覚ましていなさい』

マルコによる福音書もいよいよゲツセマネのくだりまでやってまいりました。このゲツセマネというのは地名ではなく「油絞り器」という意味です。大体、オリーブ畑の広がる大きな農場には油絞り器が置かれていたようですから、どこにでもある畑の片隅程度の意味合いでしょう。

さて、ここでイエスはペトロ・ヤコブ・ヨハネの三人を伴われます。ご存知のように「ヤイロの娘」(5;37)、「山上の変容」(9;2)の場合と同じです。この三人を同行される表現は、これから大切な事柄が示されるからしっかり聴きなさいという前置きでもあるのですが、更に初代教会が経験上獲得した「生と死」の狭間にある人々に関する看取りが述べられてゆくのです。例えば 33 節以下の「イエスの苦悩」についての描写などは、初代教会の日常的な働きであったところの「死を目前にした人」の描きなのです。

イエスは「わたしは死ぬばかりに悲しい」(34)と言われます。この「悲しみ」とは感情的なことに留まらず、肉体的な痛みも併せ持ちます。「死ぬばかり」とは「死に至るまで」という意味です。つまり、「心身を滅ぼすほどの大きな悲しみ」「むしろ死を願うほどの激しい痛み」なのです。

初代教会の経験とはこれらの「苦痛」との闘いでした。痛みをコントロールする効果的な鎮痛剤のなかった時代です。体をさすり、頭をなで、これが神の意志にかなうこと、つまり恵みであることを繰り返し伝えることを通して、悲しみや苦痛を否定するのではなく、受け入れることへと導いたのでしょう。

そこで生まれたのが「アッバ」(36)という新しい神理解でした。ユダヤ教は神をアッバとは呼びません。彼らにとって神は「律法」なのです。しかし、初代教会は律法は死に瀕する人々に何も与えはしないことを見抜いていました。アッバとは家族という人格としての信頼関係に基づく呼び掛けだったのです。そこには既存のユダヤ教にはない暖かさがありました。

病や貧しさや苦しみからの救いを求めるのは御利益的であり、罪と死からの救いを求めてこそ信仰であるなどと言われますが、果たしてそうでしょうか。そうではなく、救いとはあるがままに包んで問わないことでしょう。閉め出すように問い詰めることは、人の考えであっても、神の意志ではないのです。

救いとは何か。わたしたちは愛する者が苦痛に身悶えする時、この問いの前に立たしめられます。救いとは「わたし」と「あなた」という暖かさに先ず包まれていることに気づくことなのです。

「目を覚ましていなさい」という言葉がイエスによって弟子たちに三回告げられます。もちろんこれらは弟子たちの無理解の強調という意味ですが、それだけに留まらず、無理解に対する「引き受け」なのです。常識的に考えれば弟子たちの完全な理解の次に受難が来るべきでしょうが、マルコは理解の上に受難を描くのではなく、無理解に対して受難そのものが「引き受け」とであると語るのです。

弟子たちがこのことに気づくのは遙か後年になるのですが、このイエスの側からの受け入れ、つまり福音の質を担って彼らは働くこととなるのです。わたしたちもまずこのイエスの暖かさに包まれて在ることから始めましょう。